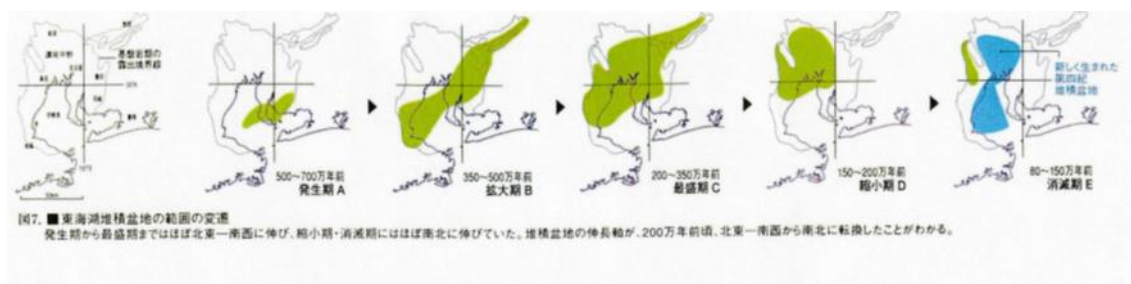


平針の歴史についてのページ（太古～江戸時代編）

小島隆広

人間の記憶のある場所に歴史があります。英雄たちの活躍だけが歴史ではありません。まして年表の丸暗記でもありません。私たちの町、平針にも歴史があります。概観してみましよう。



牧野内 猛「知多半島の地形・地質とその生いたち」より転載

（「知多半島が見えてくる本 vol.2～ビジターズ読本～」所収 2002 年発行）

今から 6 5 0 万年～1 2 0 万年前、東海地方一帯には「東海湖」と言われる湖がありました。この東海湖に住んでいた ネコギギ・ウシモツゴ・ハリヨ・イタセンパラといった淡水魚類は世界でもこの地域にしかいない貴重な生態です。また湖畔の湿地帯にハルリンドウやカキラン、ヒツジグサ（日本原産の小さな睡蓮）、サギソウ、シデコブシやハナノキ、ヒトツバタゴ、シラタマホシクサ、ミカワシオガマ、マメナシなど、この地方独特の植物の生態もあります。島田緑地にわずかに残された丘陵にそれらの植物を見ることができます。また、亜炭・京土・磨き砂（木曾御嶽山の噴火時の火山灰）・陶土もこの東海湖の頃に堆積した地層です。



島田緑地 サギソウ



島田緑地 シラタマホシクサ

今から2万年ほど前、最後の氷河期が終わり、地球が温暖化しました。内陸部まで海が進入し（縄文海進）、この地域には「年魚市潟（あゆちがた）」と呼ばれる干潟が形成されました。現在の天白川に沿って、日進市三本木あたりまで入り江が入って来ていたようです。

「あゆち」を律令政府の命令で地名は漢字二文字で書くことになり、「愛智」、愛智郡となり、これが現在の「愛知県」の語源となりました。

八事の「音聞山」は海の波の音を聞ける名所ということで、平安時代には歌枕になりました。



八事神社 音聞山勝地の碑

古墳時代には植田に大型の前方後円墳が築かれました。またこの頃、東山一帯で須恵器（朝鮮半島から伝わった陶質炆器。窯で焼く。）の生産が始まりました。この陶器の生産は鎌倉時代まで行われ、東山・八事から、鳴海、岩崎、黒笹まで拡がり、「猿投古窯群」と名づけられています。平針の山にもたくさんの窯跡がありましたが、宅地開発のため撤去されています。この猿投古窯の技術が瀬戸や常滑に伝わり、現在まで続く陶磁器産業になっています。



植田八幡宮



植田八幡社古墳



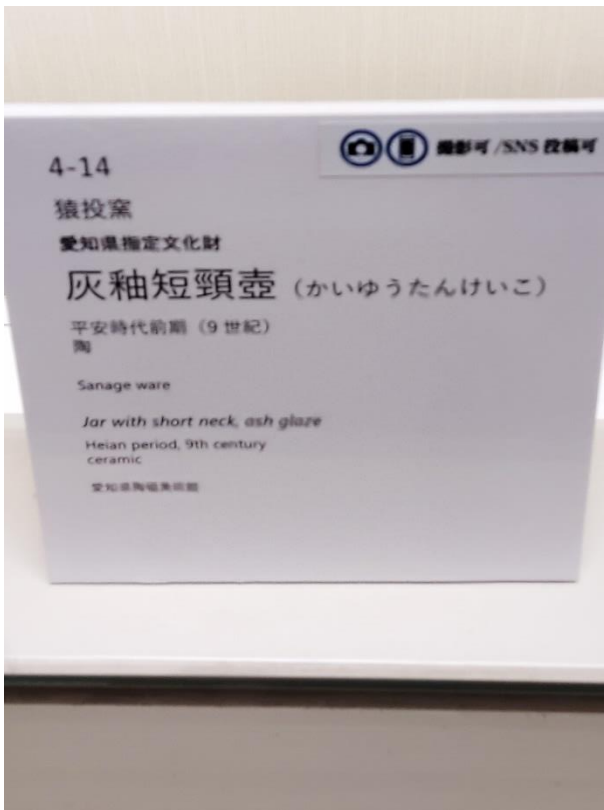
日進市 香久山古窯 (岩崎45号窯)



瀬戸市 愛知県陶磁美術館 南山9号窯 (平安時代)



猿投窯生産品（平針とは関係ない）



「灰釉短頸壺」愛知県陶磁美術館蔵

平安時代の延長5年（西暦927年）、延喜式（養老律令の施行細則）編纂の一環として「神名帳」が作成されました。朝廷が祭祀を行うため、全国に存在する神社を調べ上げたものです。この中に「尾張国 愛智郡 従三位針名天神」と記載があり、これは現在平針に鎮座する針名神社のことではないかと言われています。つまり平安時代には既に針名神社は存在していたこととなります。それで「式内社」という格式が付いています。ただし場所は天白川沿いの神田公園（元天神）あたりであったと思われます。



針名神社

言伝えによると、平安時代の大同4年（809年）、遠江国秋葉山に住む秋葉三尺坊大権現が、京都御所大火を鎮めるため京都に上り、その帰途この平針の地に立ち寄って休息し、そこにあった岩に爪で「鎮防火燭」の文字を刻みつけた、この故事によって秋葉山きゅうせきざい休跡齋（慈眼寺）が創建された、とされています。

三尺坊大権現とは、元の名を「周国」といい、信濃国戸隠で生まれ、越後国蔵王堂で修行した実在の修験者で、27歳の時に不動三昧の修法を行って十二誓願を発し、

- 1、自他出火の難
- 2、弓箭鉄火の難
- 3、無実繫累の難
- 4、内外病疾の難
- 5、受怨呪詛の難
- 6、女人分娩の難
- 7、電雷風水の難
- 8、刀杖迫害の難
- 9、毒菓害身の難
- 10、毒蛇悪獣の難
- 11、訴訟係争の難
- 12、貪瞋痴疑の難

この修法が満願すると、烏形両翼にして劍索を持った迦楼羅天となり、3尺（90.9cm）の高さを空中浮遊する身に神変したとのこと。遠州秋葉山に住み、この山の天狗を従え、白狐にまたがり、諸国を歴訪して、鎌倉時代の永仁2年入定したと伝わっています。

信者は「おんひらひらけんびらけんのうそわか」の真言を7回唱え、次の3つの難から逃れられるとしました。 **第一我を信ずれば、失火と延焼と一切の火難を逃す。 第二我を信ずれば、病苦と災難と一切の苦患を救う。 第三我を信ずれば、生業と心願と一切の満足を与う。**



秋葉山慈眼寺

Handwritten header text at the top of the page.

Main body of handwritten text, consisting of several vertical columns of cursive script.

Handwritten text on the left side of the page, possibly a signature or date.

尾刈 町道 大聖寺 石徹白
 藤田 菅田 沼田 池田
 上田 多村 祐 平村
 赤池 梅森 畑 雲田
 後田 和貝 下津 岩崎
 赤池 有枝
 梅森 平 有枝 有枝
 天又 廿三年 十月廿

「岐阜県史」資料編古代中世 8 1 7 P 郡上郡桜井文書 石徹白 桜井古義氏蔵
 中居神社の社人白山信仰

戦国時代の天文21年(1552年)、岐阜県郡上市石徹白^{いとしろ}にある「桜井文書」に「散田 菅田 島田 池庭 上田 高針 社 平針 赤池 梅森 野賀田 浅田 和具 下津 岩崎 藤島 藤枝」の地名が見られ、これが「平針」の地名が現在のところ発見されている文献に出てくる最初の例です。おそらく「平針」の村は室町時代後期から戦国時代初めの頃にできたのでしょう。

解説：八事に中世から江戸時代にかけて、大聖寺という大きな寺院があったらしい。そのお寺の栄白京四郎は白山信仰の先達(信者を先導する人)を務めていて、有力な信者(檀那・旦那)を束ねていましたが、天文21年になんらかの理由で檀那からお布施を徴収する権利を、同じ白山信仰の先達であり、美濃国郡上郡石徹白に住んでいた、桜井平右衛門尉に売却しました。その檀那たちが住んでいた地域が菅田～平針～藤枝などの16ヶ村だったということです。そして同年に賢秀という檀那が桜井平右衛門尉に、檀那のいる地域を報告したものと理解できます。つまり戦国時代の平針の住民が、八事の大聖寺の信者で、白山妙理大権現を信仰していたということがわかります。

日進市岩崎町にある岩崎城の城主であった丹羽氏の記録「丹羽軍功録」と徳川幕府の編纂した「寛政重修諸家譜姓代録」によれば、天文22年（1553年）織田信長が岩崎城を攻めたところ、横山の戦いで丹羽氏の奇襲を受けて敗戦し、裏平針あたりまで追撃を受けたとあります。

また永禄3年（1560年）の桶狭間の戦いの時に、信長の家来の佐々成政が後詰めを率いて平針城に入ったと「信長公記」に書かれています。

針名神社の森に、信長時代の一里塚と言われる盛り土があったり、桶狭間の戦いの折、信長が秋葉山慈眼寺に戦勝祈願し、戦後、秋葉三尺坊大権現の像を寄進した、などという言い伝えがあることから、この時代の平針は織田氏の勢力圏だったのでしょうか。

小野田勘六が平針城を構えたのもこの頃のことかと思われます。



現在の日進市、岩崎城跡 当時は石垣や天守は存在しなかった

江戸時代後期に書かれた「尾張徇行記」によれば、1600年あたり、関ヶ原の戦いの頃の住民は戸数16戸程度の小村であったが、徳川家康の直命により、南の丘陵地に移転し、流浪する浪人を集めて、街道の宿場町・伝馬役を勤めることを仰せつかった、とあります。当時天白川沿いにあった小さな集落（元郷）でしたが、家康の命令により、岡崎から名古屋に至る最短コースの新しい街道（駿河街道、姫街道・岡崎街道・平針街道ともいう）を建設するにあたり、平針の丘陵地（平子山）に中継地の宿場町を作り、公用の荷物をリレーする「伝馬役」を務めることを指示されたのです。

当時の徳川家康は、大坂城の豊臣秀頼を包囲するため、名古屋の地に大きな城郭・城下町を作り、軍勢の行動を迅速にするため、各地に街道を整備しました。その一環として駿河街道、平針宿も作られることになりました。

名古屋城下、本町筋と伝馬町通りの交差点、札の辻を起点とし、駿河町から城下町を出て、矢作川右岸の宇頭まで続く街道です。幹線道路東海道のバイパスという意味で「姫街道」という呼び方もあります。

慶長17年（1612年）、家康が新しい街道を作るためこの地を通りかかった際、庄屋の村瀬仁右衛門に宿場を作れと命令しましたが、仁右衛門は「戸数わずか16戸では任に堪えられません。」と断ったところ、家康は「徘徊している浪人たちを村人として住まわせればよい、年貢と伝馬役以外の諸役（税）は免除してやる、また焼失して廃寺になっている寺を再興してやる。」と言って宿場を作らせました。この時再建されたお寺が秀伝寺です。

そして庄屋仁右衛門宅に本陣（身分の高い人の宿泊施設）が置かれ（平針旧公民館付近）、宿場の駅長は須賀平左衛門が務めました。仁右衛門は今川氏の浪人であった竹内伝兵衛を養子に迎え、以後明治維新まで村瀬伝兵衛の子孫が平針村の庄屋を務めました。平針小学校のある山を伝兵衛山といい、麓に伝兵衛家代々のお墓があります。

慶長20年（1615年）、大阪夏の陣で豊臣秀頼が攻め滅ぼされると、駿河街道の軍事的価値は低下し、平針宿も衰退しますが、江戸時代中期以降、民間需要によって活気を取り戻しました。

飯田街道、熱田街道の分岐点になり、挙母・寺部へ行く人たちも平針を通りました。

塩などの平野の産物が信濃国方面に運ばれ、絹・木炭などが名古屋の町に運ばれました。

またお蔭参りといって、伊勢神宮に参拝する人たちもこの道を通りました。

ただし、大名行列のような公用の利用は少なかったそうです。



平針宿本陣跡 現平針旧公民館

寛文村々覚書による江戸時代前期の平針村の村勢は、

人口 536人 (男278人 女258人)

家 68軒

石高 約480石 (石高とは年貢の基準となる見なし生産高)

馬 40匹

宿場の家並は伝馬役を勤めているため、非課税地

溜め池5ヶ所 新池・口なし池・細口池・平池・つぶら口池

寺 祥雲山秀伝寺 観音堂

神社 天神祠 八幡社

土橋 13ヶ所

尾張徇行記による江戸時代後期の平針村の村勢は、

人口 654人

家 144軒

石高 760石

馬 9匹

溜め池 新池・口なし池・細口池・平池・つぶら口池・広久手池

(馬の数が40頭から9頭に減っているのは、伝馬制度が崩れ、民間の輸送は「中馬」が担うようになったからだろうか？大名行列のような公用の利用は少ない宿場であった。)

尾州領郷帳に見える掟書

定め

1、この度、お前の村に、東海道伝馬宿(公用の荷物運びのリレー)を申し付けるので、御公用のリレーに携わる人、馬、きちんと用意して勤めなさい。

付随して、伝馬役以外の税・労役、堤防工事の労役は免除する。

1、無理な買い取り、暴行、けんか、口論をしてはならない。

1、手形が無いのに公用と名乗って、無理に人馬を利用しようとする人がいれば、その人を留め置いて、名古屋まで報告しなさい。

1、お前の村の新しい町へ、移転して来た者で、地頭や代官の許可がない者は、よく身元を調べてから居住させること。

1、新田になりそうな場所はどんどん開発しなさい。3年以内は年貢を課さない。

この条々しっかりと定めた。上述の通りである。

慶長17年壬子10月 日

藤田民部

原田右門

寺西藤左衛門

1、権現様(徳川家康)が慶長17年に、三河国岡崎から名古屋・清州近辺までお歩きなされて、それ以前は道路がなく、山の中をお通りなされ、その時、この平針村の平子山というところにいらっしゃった。そこで平針村の庄屋を呼び出された。庄屋の仁左衛門が御前へ出ると、近くまで呼び寄せられ話を聞かれた。「平針村の百姓どもは人数が減って、今16人がいるばかりです。これではとても伝馬役は勤まりません。」と申し上げた。家康からの命令は、これからこの地の家屋敷は非課税とする。また他の税も免税にするから、他の所より人を集め、伝馬役を勤めよ。」というものだった。そこで仁左衛門は恐れ入ってお請けした、という話が伝わっています。以上

元禄8年亥どし6月

愛知郡平針村庄屋

伝兵衛

組頭 庄九郎

同 平左衛門

江戸時代の平針 まとめ

- 1, 戦国時代までの平針は天白川沿いに16戸ほどある小集落だった。
- 2, 徳川家康が、大坂の陣に備え、近道として名古屋～岡崎間の新しい街道（駿河街道）を作らせるにあたり、平針村を丘陵地帯（平子山）に移転させ、宿場にするよう命令した。
- 3, 徘徊していた浪人などを定住させ、宿場町を作り、伝馬役をやらせた。
- 4, 公用の宿場としての繁栄は長く続かなかった。農業が主体。江戸中期から民間需要。
- 5, 石高は、江戸時代前期で480石ほど、後期で760石ほど、伝馬役の費用として577石ほどが非課税であった。
- 6, 人口は、前期で68軒、536人（男278人、女258人）
後期で144軒、654人。
- 7, 新田は、原新田（原2丁目）・寅新田（平針3丁目）・子新田（荒池2丁目）・未新田（平針3丁目）。
- 8, 祥雲山秀伝寺（曹洞宗）、観音堂、天神社（針名天神）、八幡社がある。各々非課税地。
- 9, 名古屋若宮八幡社の100石の領地がある。
- 10, 溜め池6ヶ所、広久手池（荒池）・ロナシ池（大堤池）・細口池・新池・平池（原中学校）・つぶら口池。
- 11, 藩所有の御林山、税を納めて利用できる定納山、砂留山（砂防林）などがある。
- 12, 藩に対し、竹や狩猟の費用を負担したり、鳩を飼育したりしていた。
- 13, 慶長17年付けの、伝馬役を申し付けた際の命令書が残っている。
- 14, 戦国時代に小野田勘六が居城していた古城跡が一ヶ所、知られていた。
- 15, 主要道路：駿河街道（岡崎街道）、飯田街道（三州伊保道）、宮道（熱田・平針街道）

（寛文村々覚書、尾州領郷帳、地方古義、尾張徇行記、天保村絵図、より）